

## 国土審議会北海道開発分科会第9回計画部会

令和5年7月18日

【増田総務課長】 それでは、定刻となりましたので、ただいまから、国土審議会北海道開発分科会第9回計画部会を開会いたします。

私は、当部会の事務局を担当いたします、北海道局総務課長の増田でございます。議事に入るまでの間、事務局で会議の進行を務めさせていただきます。

当部会は国土審議会委員1名、特別委員6名、専門委員16名の計23名で構成されております。本日の会議はオンライン形式を併用して実施しておりますが、国土審議会令に定める定足数を満たしておりますことをご報告申し上げます。

本日の議事についてでございますが、国土審議会運営規則の規定により、原則として会議及び議事録を公開することとしております。このため、事前に傍聴を希望された皆様にはオンラインで、一部の報道関係者には会議室で傍聴いただいておりますが、報道関係者によるカメラ撮影は、円滑な議事進行のため、議事に入る前の冒頭のみとさせていただきます。

また、議事録については、後日、委員の皆様にご確認いただいた上で、発言者氏名入りで公開させていただきますので、あらかじめご了承くださいませようお願い申し上げます。

なお、ご発言に当たってはチャット機能も活用させていただきますが、その内容についても原則、議事録に収録させていただきますので、併せてご了承ください。

本日の配付資料については、議事次第に記載のとおりとなっております。委員の皆様には、事前に電子メールにより送付させていただいております。傍聴の皆様につきましては、当部会のホームページに資料一式を掲載しておりますので、必要に応じてご参照ください。

なお、通信環境によるトラブルが生じた際には、事務局の判断により、一度、会議の進行を中断させていただく場合がございますので、ご了承ください。

議事に先立ち、5月に開催されました第8回部会以降、新たに就任された委員の方をご紹介いたします。北海道副知事の濱坂真一委員、札幌市副市長の天野周治委員でございます。このほかの委員のご紹介につきましては、時間の都合上、資料1の計画部会委員名簿をもって代えさせていただきます。なお、濱坂委員におかれましては、所用により途中からご出席となる旨、藤沢委員におかれましては途中でご退席となる旨、お聞きしております。

小笠原委員、越塚委員、篠原委員、高村委員、二村委員、村木委員におかれましては、所

用によりご欠席との連絡をいただいております。なお、欠席される小笠原委員と篠原委員からは事前にご意見をいただいております、内容については出席者にお知らせしているほか、議事録にも収録させていただきます。

次に、国土交通省の出席者についての紹介ですが、出席者の皆様に事前に送付しております出席者名簿をもって代えさせていただきます。

ここで、部会の開催に当たりまして、北海道局長の橋本から挨拶申し上げます。

**【橋本北海道局長】** 北海道局長の橋本でございます。今回は第9回ということで、手元の名簿にある、このお忙しい先生たちに、計9回も、私どもの北海道総合開発計画のためにお時間を割いていただき、本当に心から感謝を申し上げます。

また、今日は会議室に加藤先生、高橋先生、棚野先生、それから中嶋先生にもお越しただいて、猛暑の中ありがとうございます。

これまでの議論について、今日で一旦の取りまとめを行いまして、年末に向けた閣議決定への道のりを歩んでいきたいと思っております。北海道の様々なポジティブな動きがある中で、それを今回の計画の中に、どのようなバランスで、どういった文言で置くかといったことも含め、様々なご指導をいただき作った素案でございます。

本日も、いろいろとまたご意見をいただければと思っておりますので、よろしく願い申し上げます。

**【増田総務課長】** 報道関係者の皆様によるカメラ撮影はここまでとさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

では、これ以降の議事進行につきましては、真弓部会長にお願いしたいと存じますので、よろしくお願いいたします。

**【真弓部会長】** 皆さん、おはようございます。部会長を務めさせていただきます真弓です。どうぞよろしくお願いいたします。

早速ではありますが、議事に入らせていただきたいと思います。本日の議題でありますけれども、議事次第にありますとおり、「第9期北海道総合開発計画に関する計画部会報告」(案)、こちらについてと、計画の進め方についての2点になります。

1点目の計画部会報告(案)につきましては、前回、第8回の当部会にお示ししました素案を、皆様からいただきましたご意見を基に修正したものであります。今回の部会において最終的な取りまとめを行いたいと思っております。

本日のご議論を踏まえた上で取りまとめました計画部会報告につきましては、9月

15日開催予定の第27回北海道開発分科会におきまして、私から報告させていただく予定となっております。

それでは、1点目の計画部会報告（案）と、2点目の計画の進め方と併せまして、一括して事務局から説明をいただいて、その後、委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。

それでは、事務局より説明をお願いいたします。

【石川参事官】 この度、7月4日付の人事異動で参事官を拝命いたしました石川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今回の第9回の計画部会は、最後の部会となります。第1回目から第8回目にわたりまして、様々な専門分野の方々から貴重なご意見をいただきました。誠にありがとうございます。新たな計画（案）がここまでまとまってきたのも委員の皆様からの有意義なご意見と、熱心な議論をしていただいた賜物と感謝しております。

まずは、第8回部会でお示ししました計画部会報告素案からの修正内容につきまして、説明させていただきたいと思います。

資料2-1、2-2を使いまして説明をさせていただきます。まず、計画の部会報告素案からの修正内容についてでございます。1ページ目、第1章第2節の第9期北海道総合開発計画の意義のところでございます。「二重の疎」に、食、観光、再生可能エネルギーが広く賦存していることが北海道のポテンシャルを示すものであり、前向きな疎のイメージを表現するため、「二重の疎」は食料供給力が高く、観光資源に恵まれ、北海道の価値を生み出す「恵まれた疎」でもあり、我が国を取り巻く状況の変化に対してという文言を追加いたします。

次に、2ページ目でございます。再生可能エネルギーの表現を充実させるとともに、政府の動きに基づいた計画であることを示すために、追記しております。

3ページ目でございます。計画の実効性を高める方策のところですが、複数の委員からのご意見を踏まえて、地域での計画の推進体制と推進方策を示すため、国、地方公共団体、企業等による協力体制の構築と官民共創の取組の推進について、追記させていただきました。

8ページでございます。地域の強みを活かした成長産業の形成、再生可能エネルギーを活かした産業振興のところでございます。再生可能エネルギーの有効活用による産業展開につきましては、北海道全体で、それぞれの地域の強みを活かしながら進める必要があることから、本文では28ページになりますけれども、重点的に取り組む施策のところ、「地域の強みを活かした再生可能エネルギー関連産業の立地促進・育成」を最初の項目に持ってき

ました。

また、苫小牧東部地域での各種産業の立地促進に関して、もともとリード文に記載がなかったため、エネルギーの有効活用による産業展開が期待されていることについて、追記させていただきます。

次に、9ページ目、経済安全保障に貢献する先端産業拠点の形成というところでございます。北海道の地理的有利性、データセンターの中核拠点としての整備、国際的なデータ流通ハブとしての企業強化について追記させていただきます。

10ページ目でございます。第2節のところ、デジタルの活用による生産空間の維持・発展、(2) 必要なサービスをデジタル技術で享受できる社会の形成というところでございます。文化的な情報にどこからでもアクセスできて、豊かな暮らしを営むことができる必要があることを示すため、都市部に集中しやすい文化・芸術等のサービスを享受できるようにする必要があるというふうに追記させていただきました。

12ページでございます。多様な暮らし方・働き方の実現のところでございます。こども未来戦略方針や骨太の方針2023を踏まえて、少子化が加速する地域社会において、子育て世代が安心して暮らせる社会を構築するための環境づくりに係る趣旨を追記するため、重点的に取り組む施策に、二地域居住や子育て世代等への空き家の活用促進というところを追記して、リード文にもその記載をさせていただきます。

説明は以上でございますけれども、資料2-2には、そのほかにも主な修正内容を記載させていただきます。これ以外にも軽微な記載の追加、表現の適正化などを行ってまいります。一つ一つの説明は省略させていただきたいと思っております。

資料2-1、2-2の説明は以上でございます。

次に、資料3で、計画の進め方についてご説明させていただきます。これまで計画部会において、複数の委員から計画策定後の進め方についてご意見をいただいておりますので、進捗状況に係るモニタリングや、計画の推進体制など、計画のマネジメントについて現時点で考えている方向性を整理させていただきます。

これらの内容は、計画策定後に改めて部会等を設置して検討することを考えておりますが、今回の部会では全体的な方向性や体制の考え方について、委員の皆様からご意見をいただければと考えております。

まず、計画のマネジメントについてでございます。第9期計画では、計画の進捗状況を点検するため、それぞれの主要施策に対して複数のモニタリング指標を設定し、これを活用し

て進捗状況を把握する、それとともに、代表的な指標により課題等を分析し、改善点を検討するPDCAサイクルでのマネジメントを進めていきたいと考えております。

評価方法のイメージですけれども、主要施策の達成度をそれぞれの項目にぶら下げるモニタリング指標、これの上昇、横ばい、それから下降傾向、そういった傾向を3種類で評価をし、それらを取りまとめて計画全体の総合的な評価を行うことをイメージしております。

次に、計画の地域展開、地域づくり推進ビジョンについてでございます。これは、現行の第8期計画でも取り組んでいることではございますけれども、各地にあります北海道開発局の開発建設部や、道庁の振興局、それから市町村、民間で構成される地域づくり連携会議、これを6つの圏域を中心に設置していて、私どもが策定する北海道総合開発計画、あるいは北海道が策定する北海道総合計画、これらに基づいて圏域ごとの地域づくりの方向性を示した地域づくり推進ビジョンを策定してフォローアップを行っているところでございます。今回の第9期計画においても、この取組は継続していきたいと考えております。

次に、官民共創の推進でございます。北海道の価値を高めるとともに、地域が直面する様々な課題の解決を図るためには、多様な主体が総力を結集して、分野を超えた協働、連携により新しい価値を生み出す官民の取組が重要となってまいります。

第9期計画では、目標実現に向けて北海道開発局の開発建設部、それから地方公共団体、NPO、企業、教育機関など、様々な機関が連携する体制として、仮称ではございますけれども、「地域共創チーム」というものを立ち上げて、地域の様々な課題に対する取組を進めていきたいと考えております。

この「地域共創チーム」の役割ですけれども、それぞれの地域のニーズやテーマに応じて編成して、デジタル技術の活用などによって生産空間の維持・発展を目指し、官民連携による取組を推進していくというようなことを想定しております。

取組の実行部隊については、共創チームの構成員が中心になりますが、そのほかにも関係する機関や団体を巻き込んで取組を推進していきたいと思っております。それぞれの所管、それから得意分野もそれぞれですので、そういった力を結集していくことで、共に北海道の未来をつくることにつながっていくのではないかと考えております。

この地域共創チームの取組は、地域づくり推進ビジョンにも反映して、地域づくり連携会議のメンバーで共有するということと、それに応じて横展開も図っていきたいと考えております。このような取組で、第9期計画の推進を行っていきたいと考えております。

細かい建付けについてはさらに検討するところもあろうかと思えます。まずは、大枠のイ

メッセージをお示しさせていただいたということでございます。

説明は以上になります。この後、計画部会報告（案）、それから、計画の進め方につきましてご意見をいただければ幸いと存じます。よろしくお願いいたします。

**【真弓部会長】** どうもありがとうございました。それでは、委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。冒頭にも申し上げましたけれども、1点目の計画部会報告（案）につきましては、今回の部会で取りまとめを行います。取りまとめに向けまして修正すべき点がございましたら、この場でご発言をいただければと思います。

併せまして、2点目の計画の進め方に関する方向性や考え方につきましても、ご意見がございましたら、ご発言をいただければと思います。ご発言につきましては、今回、最後の部会でもありますので、出席者名簿の順でお願いしたいと思います。

ただし、途中でご退席予定の藤沢委員については、最初をお願いしたいと思います。そして、遅れてご出席予定の濱坂委員につきましては、最後に指名させていただきます。なお、皆様発言後に、可能であれば再度ご発言いただく時間を設けたいと思いますけれども、これまで同様、リアル参加の皆様も含めまして、チャットによるご発言が可能です。追加のご意見や補足、そして各委員のご発言に対するコメントなどがございましたら、併せてご活用いただければと思います。

また、時間にも限りがございますので、ご発言はお一人様4分程度でお願いしたいと思います。

それでは、トップバッターとして、藤沢委員、お願いいたします。

**【藤沢委員】** 申し訳ございません、途中退席ということで、順番を前にしていただきありがとうございます。

まず、取りまとめに関しましては、本当に北海道という様々なテーマがある中で、見事に取りまとめていただいたとっておりますし、何よりも最初の前文のところ非常に過去を振り返り、力強いメッセージから始めていただいている、少しこれまでの計画に比べて、いつも本気度は高いと思いますけれども、さらに本気度の高いものになったのではないかと。事務局の皆様のアーティスティックなご努力に大変感謝申し上げます。ありがとうございます。

推進については、推進の仕方はいつも大体同じような感じなのですが、2つ、ぜひともお願いしたいことがございます。1つは、結果を見ていくというのは、もちろんとても大事なことはあるのですが、やはり昨今のデジタルの進化のスピードを考えると、結果

を見ながらも、プロセスの間でデジタルを使って変えていったほうがいいものがあれば、これは果敢に変えるというチャレンジをしていただければいいかと思います。

本質的に何をやりたいのかということがきちんと書いてあるので、やり方については、都度、議論できるような体制をとっていただければと思います。

2点目につきましては、やはり、北海道というのは多くの方が訪れる場所でもありますので、計画の推進状況というのもできるだけ多くの方に見ていただく機会をつくっていただけるといいのではないかと思います。

その理由というのは、やはり北海道の様々な取組にはいろいろな方の知恵が入り、いろいろな方のお力を借りられることが第一だと思いますので、チャンスがあれば、できるだけ計画の今の推進状況というのを、リアルに北海道に来ていただいて見ていただき、またアドバイスをいただき、中には、新たなリソースを提供してくださる仲間を増やしていくというような取組も、ぜひとも進めていっていただければと思います。

今回の計画の実現には大変期待をしておりますし、事務局含め、座長を含め、委員の皆様含め、本当に素晴らしいものをつくっていただきまして、そこに仲間にしていただいたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

**【真弓部会長】** 藤沢委員、どうもありがとうございました。事務局の回答がございましたら、最後にまとめてお願いしたいと思います。ただし、その場でお答えいただいたほうがよいものにつきましては、適宜対応をお願いしたいと思います。

続きまして、天野委員、お願いいたします。

**【天野委員】** 今年5月に札幌市副市長に着任いたしました天野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日が最後の計画部会ということでございますが、これまでの議論や意見を踏まえ、報告（案）を大変よく取りまとめていただいたと思います。ありがとうございます。

さて、これまで札幌市といたしましては、水素モデル地区の整備などの、ゼロカーボン北海道の実現に向けた取組や、北海道新幹線の札幌延伸に向けた交通結節機能の強化、さらには、スノーリゾートシティSAPPOROとしてのブランド化による観光客の誘客など、北海道が目指す将来像の実現に向けて、札幌市が果たす役割について発言をさせていただいておりました。

また、今年6月には国や北海道などと連携し、北海道の国内随一の再エネポテンシャルを最大限に活用し、世界中からグリーン・トランスフォーメーションに関する情報、人材、資

金が集積するアジア・世界の金融センターの実現に向け「Team Sapporo-Hokkaido」を設立したところであり、今後、具体的な取組を展開させていきたいというふうに考えております。

本日、今後についても説明がございましたが、本計画策定後も引き続き国や道と連携し、有識者の皆様からご指導やお力添えをいただきながら計画推進に取り組んでまいりたいと考えております。どうぞよろしく願いをいたします。

私からは以上でございます。

**【真弓部会長】** 天野委員、ありがとうございました。

続きまして、五十嵐委員、お願いいたします。

**【五十嵐委員】** これまでの計画部会での議論や発言をよく整理をしていただきまして、事務局の皆様は御礼を申し上げたいと思います。おかげさまで、計画としての構造、構成が非常に分かりやすくなりましたし、やるべきことも明確になったと思っています。

その上で、4点ほど申し上げたいと思います。まず1点目ですけれども、計画を策定する当初から、2050年を目指したバックキャスト方式でつくっていくという、非常にチャレンジングなことだったと思います。2050年といってもちょっと遠いので、おそらくその手前の10年後ぐらいを1つの到達目標として進めていくんだろうと思います。

ただ、バックキャスト方式というのがまだ定着しておらず、バックキャストというのは、将来、このままだとうなるぞと、しかし、ここを目指すんだということ、将来像をつくった上で、現状とのギャップがある、このギャップをいかに埋めていくのかという手法が、バックキャストだということでございますので、必ずしも現状の課題を解決するというのみならず、それも含むんですけれども、いかに将来に向けてプロセスを踏んでいくのかということが計画として求められるところかと思っています。

幾つかそういうところは見られますけれども、やはりまだ現状に対する問題解決だということも見られるというのは否めないと思っています。しかしながら、こうした考え方を、今後、計画策定のデフォルトにする必要があるのかと思っています。特に人口減少していく中であっては、それが重要だろうと思っています。そういう意味では、チャレンジングな計画になったと思っています。

ここからちょっと細かいんですけれども、2点目が13ページ目の28行目。若い世代の人口増加率がプラスに転じている市町村が増加傾向と、これはそのとおりなんですけれども、やや、若い世代って誰なのかなとか、実際には、大学を卒業した頃の若い人たちの転出傾向というのは、コロナが終わっても続いておりますし、特に女性の転出増加が増えた。



だから、それが終わってまた戻ってくる世帯もちろんあるんですが、これを読むと、子育て世代がちょっと戻ってきているような印象がございます。若干のミスリードにならないかなということが気になったところです。もちろん、増加している、プラスに転じている市町村はあるんですけども、それはまだ限られているというのが現実ではなかろうかと思いました。別にこれは変える必要はありませんけれども。

世代ごとの分析を深めていくと、実はどの世代が転入しているかということもさらに明確になるかなと思ったところです。

3点目が、14ページ目の共創ということ。これは非常に重要な概念だと思いますし、今後の進め方のところも、この共創ということが書かれております。これはぜひ進めていただきたいと思うんですが、この部会の中でも、どなたかがおっしゃっていた、今後必要な考え方としてシェアという考え方があります。

時間とか、空間とか、それから人的資本というのを、今後シェアしなきゃいけないという時代に突入していきますので、共につくるということは、資源をいかにシェアしていくかということにもつながるとい、その方法論、実はまだこれも確立されていないので、これをぜひ検討することが今後必要なのかなと思うということ、どこかで考えていただければなと思っています。

篠原委員からのコメントにもあったと思うのですが、農産物の物流の件についての課題認識があったと思うんです。これもシェアを考えたら、例えば新幹線の一部車両を貨物用にするとか、貨客混載の件はここに入っているんですけども、そういう課題があるところに、将来に向けて具体的に貨客混載を広めていくんだということも考えられる。こうしたこともシェアにつながるのではないかと思います。

それから、最後、今後の進め方なんですけれども、官民共創の推進、これはぜひプロジェクトベースで進めていただければと思います。ここも、資料3の7ページで、地域共創チーム取組のイメージがございます。このとおりでらうと思うんですが、冒頭申し上げたバックキャストリングを考えると、この一つ一つにビジョンとか、どういう姿を目指しているのかと、だから、こうやっていくんだという、そういう進め方を考えていただければとおもいます。

どうしてもこの現状と課題からスタートすると、そこから抜けられないということがあるんです。そこには多分、いろいろな利害関係があつたりして動かないということもありますので、みんなが共有できる将来像、これを目指すんだよというところを目指して、どのよ

うにやっていくのかということを一つずつ進めていただければと思います。

以上でございます。

【真弓部会長】 五十嵐委員、ありがとうございました。

続きまして、石黒委員、お願いいたします。

【石黒委員】 北海道大学の石黒でございます。改めまして、素晴らしい計画にさせていただき、御礼を申し上げたいと思います。事務局の皆様、それから委員の皆様含めて、様々な議論の積み重ねがこうしたものになったというふうに思いますので、私もその仲間に入れていただいた1人として、厚く御礼を申し上げたいと思います。

特に観光に関しましては、従来の開発計画に比べ量・質共に大変に充実したのものになったのではないかと感じております。特にコロナの直下で計画策定が始まり、その影響を視野に捉えながらも、長期的な視点とバックキャストの発想で内容を構想しなければならないという難しい状況であったことを踏まえ、本計画における観光に関する記述・言及の充実は特筆に値すると感じています。観光については、他の産業以上に日々刻々と状況が変わる産業でございますし、また外的要因がかなり大きく影響を及ぼす産業です。しかし本計画では、非常に意欲的に、挑戦的に書き込んでいただいたと思っています。この点は大いに評価させていただくべき、そして評価いただくべき点だと考えています。

特にカスタマーエクスペリエンスの考え方、あるいはdestinationイメージ、そして財源論を含めて、これまでになかったようなキーワードや視点を入れていただいたということも、私は非常に前向きに捉えております。

それから、計画の進め方についてです。こちらも非常に議論を重ねていただいたものというふうに受け止めましたが私から2つコメントしたく思っています。

1つは、特に地域ごとの議論のあり方についてです。第8期計画と同様に地域づくり連携会議を主体として計画を推進するということかと思いますが、ご存じのとおりDMO含めて、地域連携を謳う枠組み、協議体は現状かなり多くあります。似たような会議が続き、地域の皆様が混乱される、あるいは同じような議論が別々の会議で行われ結果的に時間や労力が無駄に割かれるということがないように、場合によってはほかの議論の場や協議体と一部合理化していくということも検討するべきかと思えます。

さらに踏み込みますと、179全ての市町村が観光を含めたあらゆる分野に重点的に取り組むというのは、あまり現実的ではないかと思えます。ですので、そこは取り組みの濃淡、取捨選択というのを勇気を持ってしっかり行ったほうが、むしろ全体の計画としてはよい

ものになるのではないかと考えています。

2つ目は、計画を広く、国民、道民の目に触れるものにするべきだということです。政府や地方公共団体が策定する計画というのは、先ほどもありましたけれども、通常は我々のような研究者や、あるいは行政や事業者の皆様が一部ご覧になることが常で、一般の方の目にはあまり触れないものなのかなと感じています。他方でヨーロッパに目を向けますと、こうした計画そのものが地域のブランディングになっている地域もかなりございます。例えば私が研究しているバルセロナはオーバーツーリズム対策そのものが都市の再ブランド化に寄与していますし、最近ではデンマークのコペンハーゲンなども、観光分野の行政計画が都市のブランディングにつながっています。派手に、華美にする必要はないかと思えますけれども、やはり今回の計画が北海道のブランディングに寄与するというようなものを目指すことが重要であろうと思います。その点を踏まえて、政府部門の、政府部門による、政府部門のための計画にしないように、最終化、そしてモニタリングのほうも進めていただければと思います。また、微力ではございますけれども、そこに私としても貢献したいと思っております。

改めて本当に大きなご作業だったと思います。ありがとうございました。

**【真弓部会長】** 石黒委員、ありがとうございました。

それでは、リアル参加いただいております加藤委員、よろしく願いいたします。

**【加藤委員】** 加藤です。まず、取りまとめに関しては、必要十分な内容だと感じております。特に、よって立つマインドとかスタンス、それから計画にしても、非常に私も議論をさせていただきながら、大変いい勉強をさせていただいたなと思います。どうもありがとうございました。

ただ、今回の北海道という非常に広い対象地域を東京で議論しているということで、やっぱりどうしても俯瞰的にならざるを得ない。これから前に進めていくのは、北海道の各地域、各現場であると。今後、いかに力強く進めていけるかどうかというのが非常に大きな課題だと思います。

私は防災の専門家とは言われているのですが、本来の分野は地域づくり、まちづくりを専門にしております。特にここ20年ぐらい、地域づくり、地方創生では旗を振っても元気が出ないという状況です。こうした状況で上手く動かそうとすると、市民が先行して行政が後を追いかけて支援する、地域が先行して国が後追いつくという方法以外ではなかなかうまくいかないことが分かってきました。むしろこういう動きが次の新たな動きを喚起して、力

強く持続的に地域づくりが進められるようになると思います。この2つのキーワードが非常に重要だと私も経験しながら感じているところです。

ですから、トップダウン的な計画と、それに加えてグラスルーツ的な動きをベースにしたボトムアップ、そのバランスをいかに上手に図っていくのかということが非常に重要だという気がしています。

そういう意味では、今回の進め方というところで、モニタリング指標で進捗管理とありますが、これは国の直轄であれば、それが最もよくて、モニタリング指標としても、アウトカム指標を使っていくということによろしいかと思いますが、地域づくりの計画については、むしろ進捗を、成果を管理していくというよりは、むしろ地域の状態を丁寧に見ていくという視点が重要だと思います。特に地域づくりは、アウトカムが出る前の助走期間がかなり重要だと思います。ですから、いかに素地が今育っているかどうか、そしてこの後、爆発的に立ち上がっていくんだという、その素地を測る、状態を測っていくという視点でモニタリングができるといいと思っております。

そして、連携会議、それから地域共創チームというのがあります。特に地域共創チームに大変大きな期待感をもっているところです。最初の地域密着のところの力強さをいかにつくっていくのか。そこをいかに丁寧に、かつ、柔軟に支援していきけるのかというところが勝負どころと思っておりますので、ぜひいい形をつくっていくといいかなと感じております。

以上です。

**【真弓部会長】** 加藤委員、ありがとうございました。

続きまして、北委員、よろしくお願いいたします。

**【北委員】** 北海道大学の北でございます。まず事務局におかれましては、第9期北海道総合開発に関する計画部会報告を取りまとめていただきまして、どうもありがとうございました。昨年3月の第1回計画部会から本日まで、膨大な作業を行っていただいたことに對しまして、心より敬意を表したいと存じます。

内容的にも、各委員の皆様のご意見が適切に反映されておりまして、大変立派な報告書が完成したのではないかなというふうに感じているところでございます。特に私の専門分野でございます再生可能エネルギーとか、脱炭素社会の形成ということに関しましては、ゼロカーボン北海道の実現に向けまして、現実的に考えられる施策を多面的に取り上げていただいております。私からは特段の異論はございません。

ところで、報告書にも記載されておりますとおり、北海道は再エネの宝庫でありまして、我が国におけるカーボンニュートラルの達成に大きく貢献するということが期待されるわけですけれども、今後は、再エネの大量導入と、やはり電力の安定供給ということをきちんと両立させていくために、電力システムですとか、蓄電池などのインフラを確実に整備していくということも、併せてしっかりと実施していただきたいということを感じているところでございます。

また、大量に導入された再生可能エネルギーを、北海道の経済発展のためにどのように活かしていくのかという視点も重要であると考えております。すなわち、再エネを活用し、利用することを通して、地域の課題を解決し、地域の方々の利便性を向上させるということ。地域のほかの産業にも波及させるということによって、地域の経済循環を強くし、地域全体を盛り立てるといふ、こういった地域の経済発展ということに関する視点ということが非常に重要であると考えております。

計画の地域展開という、今後の計画の進め方を考えていくに当たっては、ぜひこうした点も考慮いただければと考えているところでございます。

私からは以上でございます。どうもありがとうございました。

**【真弓部会長】** 北委員、ありがとうございました。

続きまして、小谷委員、よろしく願いいたします。

**【小谷委員】** これまで、計画をまとめていただきまして、ありがとうございました。北海道の未来の方向性が見える、希望のあるものになったと思います。感謝申し上げます。

農業を取材している立場から言いますと、改めて今回のこの食と観光、そしてゼロカーボンという環境の分野に北海道らしさというものがあるわけですけれども、その本当に根幹をなしているのが農業であり、第一次産業だと思います。どうしても外向けの発信に、北海道外の市場、マーケットに目が行きがちですけれども、やはり一番重要なことは、そこで営んでいる人、地域での生産者ですとか、地域で暮らす人が生き生き、生産現場がやる気を持って生き生き輝くことが重要だと思います。

それから官民共創の推進という部分がありました。計画も大事ですけれども、やはり実際に現場で、地域ごとにどう推進していくかという現場の行動に、アクションにどう落とし込んでいくかということがとても重要だと思います。そのためには、地域ごとに、共創チームというのは縦割りにならず、地域で取り組んでいけるということが重要だと思います。

そのために、1つ、視点としては、教育という、子供たちが関わるということも強く要望

したいと思います。子供たちが関わることで、後々のシビックプライドになり、未来の北海道をつくる人材になっていくということだと思います。まとめますと、地域を耕す生産者、地域住民、そして地域の子供たちも含めて、改めて地域ファースト、道民ファーストという、そこに暮らす人の笑顔を考えることが、みんなが訪ねたくなる、住みたくなる北海道につながっていく好循環になることを期待しています。

ありがとうございました。

**【真弓部会長】** 小谷委員、ありがとうございました。

続きまして、高橋清委員、よろしく願いいたします。

**【高橋（清）委員】** 高橋でございます。まず最初に、計画をまとめていただきました事務局の皆様本当に感謝申し上げます。短い時間の中で、大変なご意見、いろいろあったかと思えますけれども、実にコンパクトに、さらにはブラッシュアップされてまとめられて、本当に素晴らしい計画になったのかなと思っております。

特に前文については、本計画のメッセージがしっかりまとめられておりますし、生産空間というものをさらに進化させるという形で、二重の疎という表現を用いていただいて、この二重の疎という表現が、まさに今の北海道のメリットでもあり、デメリットでもあるというところを、しっかり表現していただいたのかなと思っております。

特に今回の計画においては、先ほど五十嵐委員からもお話がありまして、バックキャストイングという方法を用いて、2050年の未来を想定しながら、現状の計画に跳ね返させていくということだと思いますが、確かに2050年、今回どこまで想像できたのかというのは、若干疑問の残るところでもありますけれども、しかし、まずこういう方法で計画を策定したということが、まず大きな一歩だったのかなと思います。

今回は将来を、リアルとデジタルのツインな社会を目指しておりますけれども、2050年になった場合は、もしかするとデジタルオリエンテッドのような社会から、リアルを想定しなければいけないような状況になるやもしれません。本当に技術の進展速度は速いものですから、どこまで想定が可能かわかりませんが、まずはこのような形を想定したことに大きな意義があると思います。

内容については、私も特段の意見はございませんが、やはり今回の2番目の課題、計画の進め方について、少しご意見を述べさせていただきたいと思います。確かにこの計画、出来上がりましたが、この計画を受け取る側、見る側の立場に立つと、やはりどうしても1つ抜けているところが、「どこで」というキーワードだと思います。

その「どこで」を実際に考えていくのかというところが、まさに地域づくり推進ビジョンだと思います。この「どこで」を含めて、この計画を受け取る側としては、まずは国としてしっかり受け止めていただきたいというところもありますけれども、国ばかりでなく、地方自治体、広域も含めて地域として、どこまでこの国の覚悟と意思を引継ぎながら、この2050年を想定した世界をイメージしていくのかというところは、まさに大きな問題点だと思います。

これから、それをどうやって進めていくかということを経験されるとは思いますけれども、そこが大きなポイントかなと思います。

もう一点、計画を受け取る側、見る側からすると、先ほど教育ということがありましたが、まさに大学も含めて若い人たちが今回のこの計画を見ることによって、自分たちの地域、北海道をもう一度見直していただくということが大きなメリットになるのかなと思っております。この人たちは、2050年はまさに働き盛りですし、今生まれてくる子供たちは2100年まで生きるということになりますので、そう考えたときに、まさに今、これからこの計画を誰のための計画なのかということを経験したときには、若い方たちだなと。

そういう方たちをどうやってこの計画の実行に組み込んでいくのかということが、これから大きな課題だと思いますし、まさにそういう方たちが真の豊かさを創ると。この計画の根幹は、最終的には真の豊かさを目指すというところだと思いますので、この数値にならない真の豊かさをどうやってみんなで創り上げていくのか、そこをぜひ期待したいと思っておりますし、私も微力ながらこれからもお手伝いさせていただきたいと思っております。

以上でございます。

**【真弓部会長】** 高橋清委員、ありがとうございました。

続きまして、リアル参加いただいております、高橋浩晃委員、よろしくお願いいたします。

**【高橋（浩）委員】** 北海道大学、高橋でございます。先ほどからお話がありましたように、北海道は広くて、地域課題も様々というような中で、そういった複雑なパズルを組み上げて、大変分かりやすく、また将来に期待が持てるような魅力的な計画にまとめていただいた事務局には、感謝申し上げたいと思っております。

今回、計画の進め方、マネジメントについてご提示いただきまして、ありがとうございます。制度をモニタリングしながら進めるということは確かに大切なんですけれども、あまり評価を強調し過ぎると、何か評価が目的になってしまうようなことが起こるとまずいなということを感じておまして、評価疲れのようなことが起こらないようにしていただきたい

いというふうに思います。

人的・予算的にも限られていると思いますので、やはり実施のほうにできるだけ割いていただくほうがいいのかと考えております。

また、社会環境や世界情勢がダイナミックに動いている中で、今回のような行政の計画というのは一度動き出すと、軌道修正がなかなか難しいところがあるのかなというふうに思うんですけども、社会変容を横にらみしつつ、その時々課題に柔軟に対応していくようなマインドも重要になってくるのかなというふうに考えています。

今回、いろいろご検討いただいたんですけども、地域展開では、やはり北海道においては開発建設部という、やっぱり地域ごとの実施部隊があるということが非常に大きな強みかなと考えております。官民共創となっていますけれども、やっぱり開発建設部にきちんと人員と予算をつけて、振興局や地域の人たちと連携して、人口減少下のまちづくりを含めた地域の課題を解決していく。北海道は広いんですが、やっぱり地域同士をつないだり、内地とか外国とつなぐところは、開発局の本局とか北海道局がきちんとグリップしてつなげていくと、そういうような地域から海外までをトータルに接続していくような展開というものを期待したいなと思います。

また、先ほどからお話がありますけれども、農業をはじめとして、北海道の全ての土台というのはやっぱり社会資本であることは間違いないと思っております。やっぱり道路と、港湾と、鉄道による交通ネットワークの整備と強靱化、北海道では高規格道路はまだまだ整備途上ということもありますし、実際に冬季に凍結融解なんかもあって、路面がやっぱり荒れているところも非常に多いということもありますので、ロバストな総合の整備と維持、これをやっぱり着実に進めるということが、今般、北海道でも激甚化している雪害とか水害時に関しても、非常に大切になっているのかなと思っております。

最後に、私の専門の地震津波と火山対策ですけども、特に喫緊の課題である日本海溝と千島海溝の地震津波対策については、棚野委員の白糠町をはじめ、現在、太平洋側自治体では急ピッチで対策を進めているところですが、自治体支援に加えて、やはり海岸とか港湾の強靱化というのも非常に重要になってきますので、国の直轄事業とか補助事業、こういうものも、もう一段きちんと高めていただくこともぜひお願いしたいと思います。

やっぱり今回の計画を含めて、道民の命と財産を守ることが全てのベースにあると思いますので、予算の確保に向けてぜひとも強力に進めていただければ、大変心強いなと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。



ありがとうございました。

【真弓部会長】 高橋浩晃委員、ありがとうございました。

続きまして、棚野委員、リアル参加いただいております。よろしく願いいたします。

【棚野委員】 白糠町長の棚野でございます。町村会の立場から出席をさせていただいております。今回、この最後の部会に当たりまして、本当に部会長の取りまとめももちろんですが、事務方の皆さん方のご労苦に心から感謝をしたいと思っております。感謝というより、うれしく思っております。

それはどうしてかと言いますと、私ども、当初から申し上げていますように、やはり北海道のこれからのさらなる発展、振興のためには、我々、町村が頑張らなければならないと思っております。もちろん、この計画は全道、皆さんが頑張るんですが、やはり何といても、我々町村がいかに頑張るかにかかっていると思えます。

それは、今回の部会の中で常にお話をさせていただいているんですが、やはり北海道の景観を見ますと、私自身の思いからいうと、第1期の開拓期、今、第2期の開拓期であります。当初は、やはり「北海道はでっかいどう」で頑張れ、これスケールメリットであります。その結果、全ての主産業が公共事業だったんです。道路や橋は手段でありますから、そのことをやはりしっかり認識した中で、結局生産者が、分かりやすく言うと、大事なことでありますから、取るだけ、出荷するだけ。あとの利益はほかに任すと、このことが非常に北海道の重い重い足かせになっているんです。

それが、今、我々は、時代も変わり、とにかく自主自立、よりよいものをつくり、育て、一気に打って出るという、こういう思いに今変わってきております。ですから、今我々が求められているのは、生産者の意識も変えていかなければならない。今までどおりにはいかないということなんです。

そういうことを考えたときの、今回のこの計画であります。当初から申し上げましたように、我々、頑張らなければならない町村が、このテーマによって、よし、頑張るぞというテーマが欲しかったわけがあります。そのことを考えたときに、まずこの前文の策定に当たっては、本当にすばらしい表現をさせていただいて、感謝しております。このことを、我々、今一番認識をしていかなければならない。

加えて、後で出てきておりますが、やはり今の環境の問題、これ地球規模ですから、温暖化も含めて、これらをいかに意識した中で地域づくり、産業づくりをしていくかということ、これは大事だと、このことについてもしっかりとフォローさせていただいております。そういう意

味では、この前書き、あたっての部分の前文と、それから、この意義の部分の、何度も申し上げてきましたが、我々町村は一次産業があって、観光ですということを常に言ってきております。

一次産業に笑顔なくして、迎えることはなりません。ですから、そういう意味でもしっかりと、このような目標にうたっていただいておりますので、いよいよ我々町村がしっかりとこのことを受け止めて、頑張らなければいけないなという思いをさせていただいておりますので、そういう意味で、今回の計画については本当にうれしく思っております。

今後においては、各先生からいろいろなフォローのお話をいただいておりますので、全てということなのですが、我々はとにかく生産性を上げて、所得を上げることに全力投球しなければなりません。この二重の疎という部分であります、ここは非常に大事であります。もう一つの表現からすると、北海道の気候風土とか資源を十分に考えていただいて、均衡ある発展を考えていただければありがたいなと思っております。

何が何でも最初が道央中心というようなことにならないように、それはそれでいいんです、優位性があるのは。でも、やはりないものは来ませんから。ですから今、電力1つも、我々全員考え違いをしていたんですが、ややもすると、北海道は再生可能エネルギーの宝庫だ。しかし、今2割余っていて、本州に持っていかなきゃならん。これを持っていくには、我々の思いを成就しようとする、私は生きておりません。実は、そのぐらいの時間がかかるものであります。

といたしますと、その間、東北海道が待つわけにいきません。やはり地域電力をつくっていかなければいけない。そういうことを意識しながら、これから進めなければ、企業誘致も、あるいはまた一次産業の効率化にも、ついていけないというふうに思っておりますので、デジタル化も含めて、そういう思いで頑張る意味でも、今回のこの計画というのはありがたいなというふうに思っております。

最後になりますが、この官民共創の推進でチームの設置、これを今後十分に活かしていただければありがたいなということを申し添えさせていただいて、ありがたいということの御礼のご挨拶とさせていただきます。お世話になります。

ありがとうございます。

**【真弓部会長】** 棚野委員、ありがとうございました。

続きまして、リアル参加いただいております中嶋委員、どうぞよろしくお願ひします。

**【中嶋部会長代理】** 中嶋でございます。このたびは、包括的な部会報告をいただきまし

て、ありがとうございました。最後でございますので、農業分野からのコメントを若干述べさせていただきますと思います。

特に食料安全保障について非常に充実したステートメントをいただいたと思います。食料安全保障を支える農林水産業、食関連産業の持続的発展を実現するための具体的な方策を提起していただきました。

一時期に比べますと、食料安全保障については、やや懸念度が下がってきているところがございますけれども、昨今、ウクライナ問題をめぐり、再び危機感が高まっております。そういったことに一喜一憂することなく、長期的に食料安全保障を確保するように、北海道農業で下支えしていただき、自給率を高めるなどの貢献を期待したいと思っております。

併せて、今回の食料安全保障を確保する上において、持続可能な生産であることへの配慮についてもコメントされました。これは世界的にも求められておりますし、我が国でもみどりの食料システム戦略の推進が問われているところです。

これに関して北海道は、これまでも率先してクリーン農業の取組を進め、さらに本年、農地への炭素貯留や温暖化ガスの排出削減、カーボンクレジットの創出を目的とした北海道カーボンファーム推進協議体を設立されていることも承知しております。ただ、既に取組に着手されたと言っても、その高い目標を達成することは決して容易なことではなく、追加的なコストが必要となったり、農業生産を拡大しようとする際に制約がかかったりすることは懸念されると思います。

これらの課題を解決するには、研究開発や技術普及の面で革新的な取組が求められるところがございますし、また関連する投資を促進するなど、それらを後押しする方策が必要となります。環境保全型農業によって生産された農産物に対して、消費者からの支持につながるように、北のクリーン農産物表示制度など、関連する認証制度がさらに広まるように、支援策もご検討いただければありがたいと思います。

その際に、デジタル技術を活用した正確な情報発信がこれまで以上に積極的に行われるよう、制度的サポートへの配慮も必要です。

環境保全型農業への取組に関するモニタリング指標は、道内で地域ごとの農業が異なることから、それぞれの農業の実態に合わせて検討すべき項目だと認識しております。このモニタリング指標を用いて、環境保全型農業の成果が広く知られることで、北海道の農業と食への信頼が高まり、それが観光価値を向上させるような好循環も形成されるということを期待したいと思っております。

これらの取組を進めて、北海道が我が国農業の先進モデルとして役割を果たしていただくことを期待いたしまして、私のコメントとさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

【真弓部会長】 中嶋委員、どうもありがとうございました。

続きまして、長谷山委員、よろしく願いいたします。

【長谷山委員】 北海道大学の長谷山でございます。最初に、本計画を仕上げていただきました事務局の皆様のご尽力に感謝致します。大変な労力とご努力であったと思っております。ありがとうございます。

この第9期計画は、冒頭、前文に始まりまして、歴史的に見ても本来の北海道らしい本質を捉えたものになっていると痛感しております。積極的に新たな取組が盛り込まれ、計画に未来が見える、期待ができるものになっていると感じております。

私の専門の視点から発言させて頂きますと、デジタル化やDXも、その量と質共に目標を適切に定めた計画となっていると考えております。専門の立場からも感謝申し上げます。

今回は、計画の進め方について発言を求められております。記載の官民共創の推進は大変に重要な視点であると思ひますし、計画の地域展開の項目も掲げられ、こちらについても、官民共創の推進に必須と思ひています。

大変に高度なものに取り組み、計画の進め方には、「拡大」というような言葉が書かれています。そこで、1つ、私からお願いがございます。現状の取組をそのままに残しながら、新しいものを進めていきますと、現場は多分パンクしてしまうと思ひます。旧来の、そして現状の取組との融合、包含によって、現場にご負担が起らないよう、配慮して進めていただきたいと思います。

もちろんそのためには、デジタル、DXが必須であると思ひます。ここにいる皆様も、チャットGPTをご利用になった方がほとんどかと思ひますが、有料のGPT-4は、テキストだけでなく、画像、映像なども含めたものとなっています。これから進める際には、ほかの委員もおっしゃっているように、デジタル、特にAIは、大変なスピードで進化しておりますので、どうぞ適宜、そのスピードを捉えながら、現場に負担が起らないよう、上手に取り入れる工夫を検討なさってください。そして、このすばらしい計画が実現されるようお願い致します。

最後に、すばらしい計画に仕上げていただきましたことに感謝申し上げますとともに、策定に関わった委員として、これからの実施のフェーズには、私自身も、しっかりと貢献してま

いりたいと思います。

皆様、どうもありがとうございました。

【真弓部会長】 長谷山委員、ありがとうございました。

続きまして、箕輪委員、よろしくお願いいたします。

【箕輪委員】 箕輪でございます。今回、議論しました第9期北海道総合開発計画は、昨今の日本を取り巻く状況を踏まえますと、食料安全保障、エネルギー政策等の観点で非常に重要なものだと捉えております。その議論に参加させていただいたことを感謝するとともに、事務局の皆様には感謝申し上げます。

今回の議論の中で、食、観光、再生可能エネルギーというものがございました。これを、やはりサステナブルな形で維持発展していくというのが重要だということを、この議論を通じて再認識いたしました。サステナブルという観点では、特にこれらを支える人財、これが最も重要であり、この人財を確保するというには非常に時間がかかる施策であるということで、道内外の教育というところから力を入れていく必要があるということが重要かと考えました。

また、食、観光、再生可能エネルギー、これらのバランスをどのような形でとっていくかと。先ほど均衡というご発言がありましたけれども、バランスというのも非常に重要な点かと思っております。社会環境とか、国際環境の変化のスピードは非常に速くなっているため、この計画を土台としながらも、その実施については柔軟に変更していくことも重要かと考えております。

施策の計画、進捗の評価という観点について言えば、計画どおり進捗しない施策も必ず出てくると思います。それこそ重要なところでありまして、原因をしっかりと分析するとともに、果たしてその施策でいいのか、変更したほうがいいのかというようなこともやっていただければ、この計画がよりよいものになっていくと思っております。

どうもありがとうございました。

【真弓部会長】 箕輪委員、ありがとうございました。

続きまして、矢ヶ崎委員、よろしくお願いいたします。

【矢ヶ崎委員】 矢ヶ崎でございます。計画の中身につきましては、ポイントを明確にした形で大変よくまとめていただきまして、私の専門の観光分野においてもレベルの高いものになっていると思っております。

計画の中身、修正していただくところはございませんけれども、2つ、留意していただ

たらなと思うことがあります。1つは、計画の中で国際会議も含めたMICEについては北海道全体でよく勉強しながら進めていくことが必要かなと思っております。MICEに関しては、ほかの項目よりもちょっとハードルが高いなと思うところがありますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

また、北海道の観光地域に国際認証の取得を促進することが明記されました。これは、観光立国推進基本計画の方向と合致するもので、大変よろしいことだと思ひております。特に、持続可能な観光地域づくりをすることを明確にするということが、国際認証の趣旨ですので、地域の方々から観光地域づくりに対する理解を得やすいというメリットがあると同時に、その地域に進出してくる、よそからの人々、投資に対しても、我が地域はこのような持続可能な観光地域づくりをするのだから、うちのルールを尊重してくださいという交渉もできるのではないかとと思ひております。

計画の進め方についても異論はありませんが、特に観光分野については、3つご留意いただければと思うことがあります。1つは、世界トップクラスの観光地域を目指すからには、北海道はこれから常に国際競争にさらされます。国際マーケット、競争の状況がどのようなものであるのかということについて、いつも留意が必要だと思ひます。

また、一方で、取組や施策が最終受益者である地域住民の心に届いているのかも大事です。世界と地域住民、両方きちんと見ながら進めていっていただけるといいかなと思ひます。地域の方々の観光への理解が進み、これをやらなきゃいけないなということが腹落ちする感じで分かっていただくことが非常に大事と思ひております。

最後、3つ目は、観光はご承知のとおり、外部性が高いので、地域みんなでやっていかなきゃいけないというところがございます。そういう意味で、官民共創ということは非常に重要なことです。ただ、先ほども少しご指摘ありましたが、観光分野ではいろいろな会議体が走っていたり、いろいろな取組があつたりしまして、少し混乱してしまうと思ひます。チームで取り組むことはすごく大事ですが、地域に観光地域づくり法人(DMO)があるならば、そのDMOをエンパワーメントするようにしてください。観光地域づくりに関する知見、経験、ノウハウ、人脈がDMOという組織の中に蓄積されていって、観光地域づくりの実践の司令塔としてレベルアップできるように、そういう配慮もしていただけると大変ありがたいかなと思ひます。

以上です。ありがとうございました。

【真弓部会長】 矢ヶ崎委員、ありがとうございました。

続きまして、山崎委員、よろしくお願いいいたします。

【山崎委員】 ありがとうございます。開発計画のこれからということで、若干のコメントをさせていただきます。

既に私が申し上げるまでもなく、ラピダスの進出、それに伴う開発ブームということで、これが第9期計画の実行の追い風になるということは確かであろうかと見ています。そうしたところを踏まえた上で、今後の課題とは何かというのを考えた上で、今回の開発計画は2050年を見据えたバックキャストという手法で課題を洗い出したんですけども、あえて50年前からのレトロキャスト、そういう言葉があるかどうか分からないんですけども、50年前から見直してみると何が見えるのかということで1点、2点、コメントさせていただきます。

1点目が、ちょうど50年前、ラピダス進出ブームのように、実は北海道でも苫小牧東部開発をめぐって、官民一体で北海道がこれから発展するんだと、ものすごい注目があつた、また、沸き上がっていました。ところが、その後、2度のオイルショックによって重厚長大型の産業立地というのは困難になってしまつて、その後、苦境を呈するということになってしまったわけです。

ですから、そうしたところを教訓にするならば、産業構造が変化したときに、あるいは国際環境、政治経済の環境を含めて、外部環境が変化したときにどう対応していくのかといったことを、これからの計画づくりのところで考えていかなければならないということです。これが、まず1点です。

もう一点は、実はちょうどこれも30年前なんですけれども、旧北海道開発庁がイギリスの北部のスコットランドを参考にした政策交流というのをやっていました。当時のスコットランドも、重厚長大型産業をどうやって変えていくのか、地域再生をどうやっていくのかというときに、そのときのリーディング産業というのが実はハイテク産業だったんです。

ですから、30年前のスコットランドというのは、世界中から多くの半導体やコンピュータ製造工場が集積していました。「シリコングレン」と言われるほどすごかったんですが、その後にITバブルの崩壊、あるいはグローバル化によって生産拠点としては地域の優位性がなくなって、多くが撤退したという事例がもう既にあるんです。

ただ、イギリス、スコットランドの教訓を引っ張るときに言えるのが、そこで終わっているのではなく、今日まで、ソフト産業の成長と定着へとつながっている点です。ソフト開発、デジタル産業、あるいはゲーム産業、そうしたものを中心にビジネススタートアップという

のも相当されています。

ですから、ハード部門だけじゃなくて、いかにソフト産業に広げていくのか。さらには、そうした人材をどうやって育成していくのかというところがポイントになると。今後の第9期計画の実行にとって重要であると思われる点、過去からの教訓として、1つは産業構造の変化、外部環境の変化にどうやって対応していくのか、予想できないような事態もあり得るんだというところを留意していくこと。

第2点目としては、DXにしても、GXにしても、ハードからソフト部門への展開、さらには人材育成というのが、これからも重要になってくるのではないかという点を申し添えたいと思います。

以上でございます。

**【真弓部会長】** 山崎委員、ありがとうございました。

続きまして、濱坂委員はご在席でしょうか。

**【濱坂委員】** 北海道副知事の濱坂でございます。真弓部会長をはじめ、委員の皆様におかれましては、日頃から北海道発展のために格別のお力添えをいただいておりますこと、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

これまでの議論についてでございますけれども、委員の皆様には、これまで8回にわたる計画部会において、北海道が置かれている実情を踏まえつつ、様々な観点からご議論いただいたものと承知をしてございます。その上で、これまで道が述べてきた意見につきましても反映をしていただき、部会報告(案)を取りまとめていただいたということにつきまして、心から感謝を申し上げる次第でございます。

その中で、道の動きでございますけれども、先週まで道議会の第2回定例会が開催されておりまして。その中で、私どもの新たな総合計画でございますが、ゼロカーボン北海道、それから次世代半導体をはじめとしたデジタル産業の集積、そういった長期にわたる大きな取組を進めていくためには、我々の計画、今は2025年度まででございますけれども、それを超えて政策を展開していくことが必要であろうということで、議会でご議論をいただきまして、そうした考え方についてお示しをし、今後、市町村や関係団体の皆様から幅広くご意見を伺いながら検討を進めまして、この年内には新たな総合計画の素案、そして、来年夏頃を目途に成案を示し、決定の上、速やかに計画をスタートできるように取り組んでまいりたいと考えているところでございます。

私どもといたしまして、北海道が持続的に発展していくためには、国と道が同じ方向を目



指して計画を策定して、連携を図って、施策の相乗効果を生み出していくことが重要であろうと考えてございます。引き続き、国の北海道総合開発計画としっかりと連携をさせていただきながら、各般の取組を進めてまいりたいと考えてございますので、委員の皆様、引き続きのお力添えをよろしくお願いいたします。

以上でございます。

**【真弓部会長】** 濱坂委員、ありがとうございました。

以上で、ご参加の委員の皆様にご発言をいただきましたけれども、追加でのご発言、ございますでしょうか。もし、補足なども含めておありでしたら、挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。ございませんか。

それでは、リアル参加の加藤委員、よろしくお願いいたします。

**【加藤委員】** 1点だけです。この中にデジタルとか、新しい技術、様々なキーワードが出てきましたが、やっぱりDXのDもちろん大事ですが、Xをいかに進めていくのかという点は非常に重要だと思います。

恐らくこのことは地方都市に共通していると思います。今までのやり方でも実はさほど困ってなくて、じり貧であることは自覚しているけれども、やり方は困っていない状況の中で、いかにXを仕掛けていくのかというところで、もう一工夫、何かが必要ではなかろうかと強く感じております。

この辺、みんなで知恵を出していければいいかなと思います。

以上です。

**【真弓部会長】** 加藤委員、ありがとうございました。

そのほか、ございますでしょうか。もし、おありでしたら挙手をお願いいたします。よろしいでしょうか。追加のご発言がないようですので、最後に、私のほうからも一言申し上げたいと思います。

これまで、各委員の皆様からいただきました真摯なご意見、そしてアドバイス、橋本局長様をはじめ、国土交通省事務局スタッフの皆様の賢明な取組によりまして、この第9期北海道総合開発計画に関する計画部会報告(案)をこのように立派に取りまとめることができ、この場をお借りして、皆様に厚く感謝申し上げます。

2050年という将来の北海道のあるべき姿を描き、そこに至るべき意義と道筋を明確に示した本報告書(案)でありますけれども、北海道に寄せられる期待の大きさですとか、北海道の持つ数多くのポテンシャルもあり、どうしても網羅的に行動計画を盛り込まざる

を得ない、こういったことは否めないと思います。

私、先ほど山崎委員、30年前のお話もありましたけれども、30年ほど前に、当時の北海道経済連合会会長の方から、こんな話を伺ったことがあります。北海道は中央省庁に陳情に行くと、やれやれ、「厄介道（やっかいどう）」が来たぞというふうに言われた時代があった。そして、北海道経済は、今、ジャンボ旅客機というのはありませんけれども、旅客機の後輪に例えられると。経済が落ち込むときには、全国に先駆けて着地するし、経済が上向きときには最後に離陸する、それが北海道だというふうに揶揄されているという話を伺ったことがあります。

そんな北海道、現在は、ある意味、千載一遇のチャンスを迎えている状況かと思っています。北海道の持続的発展に向けて本当にチャンスが来たかと私自身思っておりますので、この計画を着実に、そしてスピード感を持って、それぞれの今後の計画を進めていくことが必要でしょうし、そのためには、計画の進め方に記載のとおりPDCAを確実に回して、状況に応じて柔軟に方向性ですとか、計画を見直すこともためらわずに行うことも大切ではないかなと感じています。

そして、地域や道民に寄り添って、理解を得ながら一体感を持って進めることが肝要であって、国や道、各自治体や教育機関、経済界、産業界、こちらの協力体制を確実に構築しなくてはならないと思います。まさに閣議決定後の動きが大切だと思いますので、事務局の皆様には、引き続き、本日お示しいただきました計画の進め方に基づく実践活動、こちらの精力的な展開について、ご尽力をお願いしたいと思います。

私からは以上でございます。

#### 《欠席の小笠原委員からのご意見》

これまでの第8回計画部会（5月22日）までを振り返り、冒頭、部会前のレクチャ時間そして、部会での説明等でご苦勞をおかけしました当時の米津参事官（現建設部長）はじめ、北海道局及び北海道開発局の皆様から感謝申し上げます。

また、各委員のこれまでのご意見やご指摘を踏まえ、高度なレベルで第9期北海道総合開発計画の目標設定をどのように実現をさせていくかの段階に入りつつありますが、北海道に住む一人として、また、自治体を預かる首長の一人として、客観的な視点での目標設定から、主体者となって責任を持って積極的に参画するには、自分自身や多くの道民の意識を主観的当事者意識にどのように導いていくか？という視点が、covid-19を経験した我々にと

っての最大の課題になると考えます。

従いまして、第3章第3節計画の進め方の1. リアルとデジタルのハイブリッドによる北海道型地域構造の観点での適切な理解と、その中にある生産空間の将来展望は、北海道の発展に大きな課題として立ちはだかる難関になると想像できます。

しかし、これからの北海道の10年を発展させ続けるためには、計画のマネジメントであるPDCAの見える化や、責任ある役割分担等により将来付加価値を上げるための資源のブラッシュアップや生産空間の発展はすべて「ひと」であるという共通理念を、第1章計画策定の意義に常に立ち戻り、未来を見つめ前進するべきと心を新たにした次第です。

改めて、多くの専門的知見者の貴重なご意見等を拝聴して、更に、サステナブルな北海道にしていくべきと考えさせられていますので、皆様に心から感謝申し上げます。

#### 《欠席の篠原委員からのご意見》

今回が最後の計画部会となりますが、部会としての最終案をここまでまとめあげられたこと、委員の皆様のご議論と事務局の方々の運営、ご尽力に敬意を表します。

私はこれまで、農業団体の立場として、北海道における食の重要性の観点から意見を述べさせていただきました。

計画案では食・観光・ゼロカーボンの順に整理頂いておりますが、やはり北海道はこれからも食と観光が根幹をなすというのが本来の姿だと考えておりますので、この順番でまとめて頂いたことを、大変嬉しく思っております。

農業については、地域や様々な経営体の実情を考慮した形になっており、環境分野についても盛り込まれております。私たち農業団体といたしましても、北海道の基幹産業である農業の存続、そして食料安全保障を支え、食料基地としての役割を果たしていくために、尽力してまいりたいと存じます。

しかしながら、北海道の重要な価値と位置付けた「食」は生産されて終わりではなく、その価値は、国民の皆様に必要なものが必要な時に届けられて初めて成立するものです。そのためには、貨物鉄道のみならずどの輸送手段が欠けてもならないという思いで、再三意見を述べさせていただきました。せっかくの計画が絵にかいた餅にならないように、計画を進めていく際には、将来の物流システムがどうあるべきか、食料安全保障の観点からも、脱炭素の観点からも、様々な角度から議論されるべきと存じます。

最後になりますが、計画の進め方において「共創」という言葉が使われております。将来

を語るうえでは大切な概念と感じております。この計画案もたくさんの方が連携して力を合わせて実現していくものと存じます。私どももしっかり取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【真弓部会長】 続きまして、各委員からのご発言に対しまして、事務局から追加の説明などがあれば、お願いしたいと思います。

【石川参事官】 参事官の石川でございます。ただいま、皆様から貴重なご意見をたくさんいただきました。いただいたご意見を参考にしながら、次の分科会に向けて、計画報告案につきましては、取りまとめを進めていきたいと思っております。

それと、多くの皆様から、これからの進め方について、多くのご意見、アドバイス、ご示唆をいただきました。そういったことを真摯にとらまえて、よりよい進め方になるように検討させていただきたいと思っております。

どうもありがとうございます。

【真弓部会長】 それでは、ただいまの事務局からのコメントに対しまして、皆様からご意見などございますでしょうか。ご発言を希望される委員におかれましては、挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

ご発言がないようですので、審議は以上となります。繰り返しとなりますけれども、議事（１）でありました計画部会報告（案）の取扱いにつきましては、本日の部会で取りまとめを行い、９月１５日に開催予定の分科会において、私から報告をさせていただきます。

事務局には、本日いただいたご意見を踏まえまして、修正すべきところは修正をお願いしたいと思います。修正いたしました計画部会報告の内容の確認につきましては、分科会の開催まで日程も限られておりますので、部会長の私に一任していただければと存じます。特にご異論がなければ、そのようにさせていただこうと思っておりますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

どうもありがとうございます。それでは、本日のご意見を踏まえた修正内容の確認については、私に一任とさせていただきたいと思っております。

また、議事の（２）であります計画の進め方について、特段の大きな意見はなかったと思っております。本計画は、今年度内の閣議決定が予定されておりますので、閣議決定後は、本計画に基づき様々な取組が進められていくこととなりますが、その際には、資料３をもとに進められると思っております。よろしくお願いいたします。

それでは、本日の議事は以上となりますけれども、当部会につきましては、皆様、ご承知のとおり、今回が最後の開催となります。委員の皆様には、大変ご多忙の中、これまで9回にわたりまして多大なるお力添えを賜りました。改めて感謝を申し上げたいと思います。

また、私事となりますけれども、私、6月に北海道経済連合会の会長職を退任いたしました。現在は名誉会長の立場となっております。その時点でのこの部会長退任を考えましたけれども、第9期計画について熱心にご議論をいただきながら、最終局面を迎えている状況でもありますので、この先の分科会の終わりまで部会長を務めさせていただくことにいたしました。

この2年間、第8期北海道総合開発計画の中間点検報告の取りまとめ、そして、第9期の計画部会報告書（案）の策定に携わることができましたが、この4年間、委員の皆様、そして、北海道局の幹部、事務局スタッフの皆様からのご理解とご支援によりまして、何とか務めることができたと思っております。御礼を申し上げたいと思います。

本計画が無事閣議決定された以降は、チャンスを迎えた北海道のため、そして、我々の思いを具現化していくため、微力ながらできる範囲でのサポートをしてまいりたいと思っております。重ね重ね皆様に御礼を申し上げまして、事務局に進行をお返しいたします。

**【増田総務課長】** ありがとうございます。最後に、北海道局長の橋本から発言させていただきます。

**【橋本北海道局長】** 北海道局長の橋本でございます。最後に国土交通省北海道局、それから、北海道開発局を代表してご挨拶を申し上げたいと思います。

第9期北海道総合開発計画について、ここまでご議論いただきました23名の委員の皆様、心から御礼申し上げます。そして、真弓部会長には本当に様々ご相談に乗っていただき、ご本人からもお話がありましたが、お立場も途中代わられて、ただ、私どもとしては何としても続けていただきたいという思いで、今日までこうしてお導きをいただきました。本当に改めて御礼申し上げます。

今日、こうして取りまとめいただいた部会報告を大きな核として、今後、パブリックコメントや、分科会におけるご意見も、しっかり受け止めて計画案に反映し、閣議決定へと責任を持って持ち運ぶことをお誓いいたしまして、御礼に代えさせていただきたいと思っております。

本当にどうもありがとうございました。

**【増田総務課長】** 以上をもちまして、第9回計画部会を閉会いたします。

真弓部会長をはじめ、各委員の皆様には、これまで当部会の円滑な進行にご協力をいただ

き、誠にありがとうございました。

— 了 —